りびんぐらいぶず　令和2（2020）年6月第2号

聞名欲往生のおこころ

◆ご讃題

「其佛本願力」といふは、弥陀の本願力と申すなり。「聞名欲往生」といふは、「聞」といふは如来のちかひの御(み)なを信ずと申すなり。「欲往生」といふは、安楽浄刹に生まれんとおもへとなり。「皆悉到彼国」といふは、御(おん)ちかひのみなを信じて生まれんとおもふ人は、みなもれずかの浄土に到ると申す御ことなり。「自致不退転」といふは、「自」はおのづからといふ。おのづからといふは衆生のはからひにあらず、しからしめて不退の位にいたらしむとなり、自然といふことばなり。「致」といふは、いたるといふ、むねとすといふ、如来の本願のみなを信ずる人は、自然に不退の位にいたらしむるをむねとすべしとおもへとなり。「不退」といふは、佛にかならず成るべき身と定まる位なり。これすなはち正定聚の位にいたるをむねとすべしと説きたまへる御のりなり。

（Ref『尊号真像銘文』第二条、註釈版聖典 P645）

◆はじめに

御門徒様のご葬儀の都度、ご遺族と共に住職もまた、改めて如来様の大悲のお心を振り返り、慶ばせて戴くのであります。

さて、**「破地獄の御文」**は、棺に納めた御文であります。改めて御文を拝読し直しますと、「これは必ずや往生せしめ**「必得往生」**、おさとりの身にせしめずばおかない**「必至滅度」**」との如来様の大悲心を表す御文です。

『尊号真像銘文』第二条の親鸞聖人の御自筆に余すところなく示されてあります。

◆法の働きと機の自覚を構造的に頂戴すべき

とりわけ御文中の**「聞名欲往生」**のお六字の存在が重要視されます。なぜなら、

・①**「「聞」といふは如来のちかひの御なを信ずと申すなり**とあるのが御文の重要性を窺わせる第一の理由。

・②**「欲往生」といふは、安楽浄刹に生まれんとおもへとなり**とあるのが第二の理由、浄土往生は、如来様のご命令だったからであります。

親鸞聖人は、聞と信については**「聞即信」**と頂戴されていました(Ref『信文類（末）』p251、『一念多念文意』(2)p677))。

聞名が浄土往生の鍵となるエンジンであることを示す大切の御文であります。

問題は**「欲往生」**に秘められたお心です。これは、法の働きたる如来様のお心は、**「安楽浄刹に生まれんとおもへ」**とのお心にあったことを知らせるご文だったからです。

「おもへ」とは、「法の働き」としての如来さまのご命令(親鸞聖人のお示し)であり、「機(私)の受けとめ」としては「仰せの通りに浄土に生まれさせて戴きたい」と願わせて戴く極めて重要なお心であります。

けだし、三業惑乱事件の源となった能化功存の指摘そのものだったことは驚きに値します。**「おもへ」**との「法の働き」に対して**「おもふ」**との機の次元の構造的受け止めが如実にこれを物語っています。

◆ここに「信前の称名は自力の懸念なしとしない」と平面的にとらえてきた御常教から脱却する鍵があります。如来様の法の働きを機の受けとめで呼応して実践的に頂戴する構造こそ重要だったからです。

◆称名念佛は、即嘆佛、即懺悔である。

智栄（ちょう）禅師の謳われた善導別徳讃嘆の御文を仰がせて戴きますと（Ref『尊号真像銘文』第八条、註釈版聖典 p655)。

・①「善導は阿弥陀仏の化身なり」

・②**「称佛六字」**といふは、南無阿弥陀佛の六字をとなふるとなり」

・③**「即嘆仏」**といふは、すなはち阿弥陀仏をとなふるは、仏をほめたてまつるになるとなり」

・④**「即懺悔」**といふは、南無阿弥陀佛をとなふるは、すなはち無始よりこのかたの罪業を懺悔するになると申すなり」

・⑤**「即発願回向」**といふは、南無阿弥陀佛をとなふるは、すなはち安楽浄土に往生せんとおもふになるなり」

・⑥「南無阿弥陀佛と称ふるは、また一切衆生にこの功徳を与ふるになるとなり」

・⑦**「一切善根荘厳浄土」**といふは、阿弥陀の三字に一切善根をおさめたまへるゆゑに、名号をとなふるはすなはち浄土を荘厳するになるとしるべしとなり」と示され、

智栄（ちょう）禅師が善導大師をおほめになっていることが知られるのであります。

「即懺悔」といふは、南無阿弥陀佛をとなふるは、すなはち無始よりこのかたの罪業を懺

悔するになると申すなり、の御文は取り分け有り難いではありませんか。

私の力では、無始よりこのかたの罪業を懺悔することはできなくとも、南無阿弥陀佛と称えれば、それは、如来様から賜った如来さまの大行を行ずる姿ですから、無始よりこのかたの罪業を懺悔することになるからであります。

私の力では、お名号の功徳をほめたてまするることはできなくとも、南無阿弥陀佛と称えれば、それは、仏をほめたてまつることになるのであります。

されば、第十七願は、諸仏称名の願と標挙（ひょうこ）されたごとく、諸仏に頭を垂れ、七高僧のお示しに従い、他力の念仏者（妙好人）のお姿に習い、わが父母の後姿に付き従って南無阿弥陀佛と称えれば、それはそのままに阿弥陀如来のお名号をほめたてまつることになるからでありました。

まことに諸仏称名は、法の働き、それに習って称えれば、衆生の上に大行法が働き出して下さり、喚び続けていて下さる招喚の勅命となり給うのでありました。

「即発願回向」といふは、南無阿弥陀佛ととなふるは、すなはち安楽浄土に往生せんとおもふになるなりと仰せ下さって居る御文であります。

私には尚、安楽浄刹に往生せんとの想いは乏しくともお念仏することがそのまま浄土往生の願いを実践的に明らかに示していて下さるのでありました。合掌。

◆仏教壮年会お聴聞の会七月五日(日)二十時より

◆仏教婦人会例会　七月十六日(木) 十九時半より

著作編集兼発行元(本願寺派 正覚寺内) 〒520-0501 大津市北小松四五二番地

TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職 堅田 玄宥